

新年のご挨拶

グラウンドワーク東海 理事長 竹谷裕之



新年、明けましておめでとうございます。

東日本大震災復興と放射能除染の遅れ、日本のあり方を変えてしまいかねないのに説明不十分なTPP参加問題、巨額の財政赤字と庶民増税・企業減税問題、沖縄の声を聞かない普天間基地移設問題、超円高による企業の海外移転とデフレ病、京都議定書期限に脱退で臨む政府、地方の疲弊と高齢化、閉塞感が覆う日本とメディアの世論誘導、独裁型政治の拡がりなど、日本が悪い方向へ悪い方向へと進みかねない中、新しい年が明けました。

大震災は他方、家族や地域のきずなの大切さ、地域社会の役割を再認識させ、力合わせて地域再建・暮らし再建の取り組みが広がりつつあります。グラウンドワーク東海もその一翼を担い、岐阜、愛知、三重の各地で自然環境の保全や修復活動、コミュニティ再生を含めた取り組みを進めてきました。それらは多くの住民、行政、企業の参画を得て、地域に根付いております。皆様の継続した取り組みに敬意を表し、今年も引き続き取り組みが前進するよう、期待しております。

合わせて昨年は、安江さんらの尽力もあり、グラウンドワーク東海として、インターシップ事業が一昨年に続き、大勢の研修生の参加を得て実施できました。地域ビジネス創出のためのワークショップは時代を反映し、研修生の好評を得ることができました。研修希望は予想以上に多く、10月には補講も行いました。いまビジネスプラン認定など、「仕上げ」の取り組みが行われています。この研修でまかれた「種」、培われたグラウンドワーク手法による地域興しの取り組みが、地域の環境改善と仕事づくりで成果を上げることを願わずにおられません。そのためにグラウンドワーク東海ができることを、新しいこの一年、努力して取り組んでいかねばと考えています。



日本グラウンドワーク協会は公益法人改革を契機に一般公益法人に変わりました。グラウンドワーク東海は、昨年の総会において役員を半減するなど、体制をスリムにし、ここ半年余、取り組みを進めてきました。この新たな一年も、団体会員、個人会員の期待に応え、会員の皆様と連携し、環境再生、地域興しにつながる活動を強めるべく、取り組みを進めて参ります。是非よろしくご協力いただきますように、お願いします。

グラウンドワークフォーラム

～心ゆたかに生きる～

日時：平成24年1月21日(土) 13:30～16:30

場所：名古屋市中区栄3丁目15番地33

栄ガスビル401会議室(松坂屋北館西隣)

地下鉄：名城線矢場町6番出口徒歩2分

東山線栄6番出口南へ徒歩5分

参加費 1,000円/名

プログラム

第1部 グラウンドワーク全国研修会報告

第2部 講演「心ゆたかに生きる」

人には、それぞれの人生があり、生きていること、生きていることに、意味があるということ…そして、人に与えるということは、それだけで自分も与えられているのだということ、心温まる話とともに分かりやすく説いていただきます。

今回のフォーラムは、地域連携・再生の心をテーマに開催します。講師の林覚乗氏は、企業や行政での研修など各地で高評価を得ておられます。聴いた方のブログ配信が多くあります。

ぜひ、ご参加いただきますようご案内いたします。

大江川クリーン作戦に参加して

グラウンドワーク一宮実行委員会主催

1 概況

昨日の雨が止み今日は非常に暖かい日となりました。

駐車場は、一宮競輪場北6カ所計216台。付近の県道に



集合場所の天道公園

は大江川クリーン作戦の幟(のぼり)が立っており交通誘導員の誘導により8:30頃に迷うことなく駐車できました。その後ぞくぞくと訪れ見る間に埋まっていきました。

集合場所にはすでに多くの参加者が集まっています。会場では、張り出された参加団体の班編成に基づきAからEのカードを持つ各スタッフの後に並びました。

9:15開会、実行委員会酒井孝会長、谷一宮市長、佐々木直修文大学学長の挨拶後、作業方法などが説明されました。次に、各スタッフに導かれ上流からA班からE班の5班に分かれ担当の区間での作業となります。



酒井孝会長

2kmを5班に区分されるので、1班400m程度となります。私が参加したDグループでは、ゴミは探さないと見つけれないほど少なめでした。ゴミは3つに区分して、ガラス、ブロックなどは土嚢袋、可燃ゴミは黄色いポリ袋、不燃ゴミ(リサイクル可)は半透明ポリ袋に区分します。

ゴミの種類ではタイヤ、自転車などの大型ゴミはなく、可燃物として桜の落ち葉が多く、不燃物ではペットボトルや空き缶がほとんどでした。実行委員会から全区間で、可燃ごみ2,840kg、不燃ごみ1,200kgと報告されました。



大江川での作業

天道公園に戻り、おにぎりとお芋煮の配付を受けるために長い列に並び受け取りそれぞれが思い思いの場所で、会談しながら食べていました。

川の大掃除を来年も頑張る
鈴木 千裕小学生11
(愛知県一宮市)
地元を流れる大江川のクリーン作戦に、母と弟といっしょに参加しました。
数年前から始めて、川に流れている落ち葉を拾ったり、川の底に沈んでいる布団や布などを引きあげたりしました。今回は、たまたま去年と同じ階段をまわることになりました。
階段に行くとき、土がつもり草がはえ、段が見えずに坂になっていました。みんな

不便そうでした。私は不思議に思いました。たった一年しかたっていないのに、どうしてこんなになってしまったのでしょうか。
私は去年と同じように、いっしょに行きました。見える段の数が減っていき、終わったときはみんな、楽にのぼれるようになったと言っていました。
私は思いました。一年でこんなに不便になってしまっています。一年後も同じでしょう。私は来年もクリーン作戦に参加し、川をきれいにしたいです。そういえば疲れるけれど、きれいな川になると、とてもうれしそうです。

2 感想等準備など

駐車場への誘導員の手配、会場の設営もテント、テーブル、看護師2名の配備、参加証明、芋煮、おにぎりなど、13回を迎え慣れておられて万全の態勢がとられておりました。



昇降仮設階段

作業へ現場の準備では、前日の雨の中、当会とグラウンドワーク東海の企業会員のイチテック(株)殿が、大江川に安全に降りるための仮設階段を設置され、今日は撤去となります。設置の指揮を執る伊貝慎二氏によれば、市民が不用意に川に進入することがないように設置時間の最小化に努めていると話されました。

○継続実施の要因

当活動が、長期間継続、参加者が多い要因を私なりに考えて見ると、比較的軽作業で、時間も短いこと。開催日(11月第2土曜日、雨天は翌日)が固定されており、参加者が事前に予定しやすいこと。市役所に事務局があることで、広く団体に参加を呼びかけられること。建設関係企業では地域貢献の実績が得られ、行政(農政局、愛知県、一宮市)、土地改良区の幹部職員の参加も要因となっていると思われます。



芋煮の配布

なお、費用の面では協賛金を募集され46団体と企業が応じ、その内建設関係企業が多く占めていました。

○更なる活動へ

水質の改善:少々ドブ臭い匂いがしました。対策として家庭排水の下水道への接続を促進すること、水質浄化へのさらなる取組みが期待されます。

安全面:人が川に転落した場合、急勾配の護岸では這い上がる手立てがありません。安全柵が設置してあるので転落は想定外との考えかも知れませんが気になる場所でした。
事務局長 宮前幸吉

東日本大震災被災地支援活動報告

本年3月11日の東日本大震災は未曾有の被害をもたらしました。当社は従業員20人の零細企業ですが、当社のできることで何かお役に立つことはないかと考え、以下の支援活動を実施しました。支援活動は大きく分けて3種類でした。第一に義捐金の寄付。少額ながら心を込めて送らせていただきました。

第二に防疫活動支援の第一弾として、現地で防疫活動を担うペストコントロール業者（以後PCO）に対して抗ウイルス加工マスクの提供。岩手、宮城、福島3県の各ペストコントロール協会に対し、社団法人日本ペストコントロール協会を通じて合計3万枚余を提供させていただきました。

第三に実際に現地に赴いての防疫活動支援です。現地での防疫活動は被災地のペストコントロール業者が担当して5月の連休明けから始まりましたが、気温の上昇に従って、被災した水産加工場から流出した水産加工品や、原料の魚からオオクロバエ、キンバエ、イエバエなどが大量に発生しはじめ、被災地域住民の方々の生活に悪影響を及ぼすようになりました。当社の加盟する社団法人日本ペストコントロール協会では、公益社団法人日本国際民間協力会（以後n i c c o）の協力を得て全国のPCOに呼びかけ、3か月余りにわたって延べ8900名余を波状的に被災地に派遣し、ハエの駆除作業に取り組みました。当社はその一員として7月初旬に社長である筆者が現地作業に従事、8月には社員1名を派遣、駆除作業に取り組みました。

筆者の担当した場所は宮城県の気仙沼港でした。宿泊場所の一関から車で約1時間半かけて港から少し離れた作業準備場に赴き、作業準備を行います。防護服に

着替え、タンクに殺虫剤を準備、漁港の散布場所に移動します。朝7時に出発して準備作業が終わって、作業開始が10時頃です。港は当時（7月初旬）も津波の爪痕が生々



しく残っていました。あたりは水産品の腐敗臭に満ち、瓦礫は5mほどにも積み上げられたままで、流出した

水産加工品を詰め込んだ土木用大型土嚢の中はハエの幼虫で満ち、ところどころの敗れた穴からあふれ出している状態でした。また、逆さになった乗用車が放置されたままになっていたり、半世紀生きてきた筆者は言葉



葉を失いました。名古屋より涼しいとはいえ、日中32度を超える気温の中、防護服に、特殊マスク、ゴーグ

ルを装着しての作業は体力的にとってもきつく、生まれて初めて1日に6リットル以上の水を飲みました。しかし、我々は作業期間が終われば自宅に戻れるが被災された方々は戻る家さえ失ってしまったことを考えると弱音を吐く気にはなれませんでした。

我々の取り組みが奏功し、ハエの発生がかなり抑制された結果を得ることができ、地元の方にも喜んでいただけたとの話を伝え聞き、小さいながら役割の一端を果たせたと思います。

被災地の復旧、復興は5年10年と長い道のりだと思います。私たち一人ひとりができることを続けることが重要だと思いました。

最後にひとつyoutubeの動画をご紹介します。

We Will Always Remember Youで検索されるか
<http://www.youtube.com/watch?v=HMtMg1t9Kbc>
をご覧ください。

賛助会員クラーク株式会社
代表取締役 坂倉 弘康

GW全国研修会の報告

主催：財団法人 日本グラウンドワーク協会

研修内容：基調講演 活動事例報告

275 (つ・な・ご) 研究所 所長 菱川貞義氏

〈集落と企業等を促すプラットフォーム〉

〔集落と企業等の連携による農山環境の活用推進に係る仕組みと連携について〕

「275研究所」が中間支援組織として関わっている環境改善への「びわこ市民研究所」の役割や、農山村の過疎化や高齢化、耕作放棄地等の社会課題に、企業の持つ技術や資金力をつなぐ取り組みをしている京都府の「いのちの里 京都村」が面白い展開をはじめている事例等が紹介された。



～「275研究所」の紹介と背景及び事例～

275研究所の紹介

強いニーズがある社会活動のビジネス化を支援している。

(背景)

- ・ICT (情報通信技術)により、一方通行のメディアが力を無くしていった。
- ・消費者行動が、個人利益軸から社会利益軸に移行しつつある。
- ・多様な主体とのつながりの上でしか“解”をつくることはできない。(環境問題、少子高齢化、過疎化、洗剤、奉仕、ソーシャルメディア…)
- ・「つなぐ」「絆」が流行現象になってきた。つながり方を問題としており、時にはつながりを弱めることも275研では「つなぐ」といっている。
- ・高度情報化社会、グローバルな社会において、中庸な、曖昧な価値感がなくなっている。
- ・集落、農業、の価値についても同じことが起きているために、持続的な農村像を描くことが困難になっている。



JGA 斎藤専務理事の挨拶

(事例1：びわこ市民研究所)

- ・琵琶湖環境の改善に行政が取り組んできたが盛り上がらなかったが研究所の「関係づくり」により活動の活性化がみられた。活動としてヨシ刈りの広がりがあり、地域の企業であるコクヨ工業社員の参加により「東近江水環境自治協議会」が刈り取ったヨシを使ったキャンパスノートをコクヨが開発販売(県内限定)している。価格は30%割高なため、当初は売れなかったが最近では完売するようになった。
- ・そして、地元(環境保全)と企業(ビジネス)がWin-Winの関係へと発展した。

(事例2：命の里・農村ビジネス化推進研究会)

京都府農村振興課

- ・農山村が立ち上がり、挑戦し、持続的発展に至るまでを、ステップ別の集中支援により確実に誘導する、総合支援を行った。
- ・視点は、農業ではなく農村業で農村を再生することに取り組んだ。一般に集落自身は「再生への思いはそれほど強くないことが多い」が、企業のニーズは「顕在化している」。多様な利害関係者とともに新しいビジネス開発をおこなう組織を育成する。
- ・実施例として「常吉村営百貨店」と「常吉集落」は農協の合併で、農協支所がなくなり急速に過疎化が進み危機的な農村環境となった。支所反対の要望は聞き入れられないため、地元住民の自発的な取り組みから試行錯誤のうえ誕生した名物店「常吉村営百貨店」と人づくりを基礎にむらづくりに成功した常吉集落の紹介。

また、「大原ダーチャバス・プロジェクト」は、京都市内と大原を結ぶバスを運行した事例で、市内の音楽家を招きコンサートを実施したほか、大原ランチとして京都市内の50人が大原で食事会を開催。

今度は大原から京都市内へ運行し、特産品を京都市内で販売し高評を得ている。

—研修を受けての感想—

この研修で、グラウンドワーク東海の置かれている中間支援組織の役割が理解できました。

事務局長 宮前幸吉

会員の活動報告

グラウンドワーク小牧(今年度分を掲載)

団体概要

代表者・青木 和芳
連絡先・小牧市久保一色216の119
活動地区・小牧市内全域
設立・平成13年 8月15日
会員数・個人75名 企業7社
活動目的・小牧市全域における環境改善活動や住みよいまちづくりを企画、実践して健康で、明るく、心豊かな、小牧を創る

当会は、小牧市民の有志の集まりで、主に道路清掃、チャリティバザー、小牧市環境フェア出展の活動を行っています。今年度の活動結果は以下のとおりです。



道路清掃の参加者の皆さん

1. 道路清掃(愛・ロードパートナーシップ事業)

場所: 県道178号線(四季の森交差点～中央高速小牧東インター取付け部の約3.0km)

① 4月17日(晴れ)参加者15名

新緑の好天に恵まれ周辺の新芽がまぶしい絶好の活動日となった。行楽のための自動車の交通量が多く危険な作業となり景色を楽しむ余裕はなかった。

例年に比べ「ポイ捨てのゴミ」はやや少なめであったが便器や古タイヤ等大型ゴミもみられた。

収集ゴミ: 燃えるゴミ5袋。不燃ゴミ17袋

② 6月19日(曇り)参加者14名

梅雨の季節として降雨を心配しながらの活動日となった。自動車の交通量は多く事故防止には最大の注意を払って作業をした。



県道178号線

路側帯は草刈りが実施されていたのでゴミが目立ち作業は容易であった。一部に古タイヤ等の放置もみられたが、ゴミは比較的少なかった。

収集ゴミ: 燃えるゴミ3袋。不燃ゴミ(不分別)11袋

③ 9月11日(晴れ)参加者15名

雨のため延期されたため参加者はやや少なめだったが、秋の日和に恵まれて快適なゴミ拾いと作業基地周辺草刈り整備を無事完了することが出来た。

ゴミは、暑い日が続いた関係からペットボトルや空き缶が通常より多かった。

収集ゴミ: 燃えるゴミ5袋。不燃ゴミ(不分別)14袋。

④ 11月6日(晴れ)参加者17名

雨あがりの作業となったが、参加人数も通常通りであった。ゴミは雨に濡れやや重かった。いつも通りペットボトルや空き缶、弁当ガラが多かった。

収集ゴミ: 燃えるゴミ5袋。不燃ゴミ(不分別)10袋

⑤ 12月11日(晴れ)、参加者21名

岩崎公園(史跡維持清掃活動)

落葉の山をブローワーで集積し協力企業ダンプ等2台で搬送。



落ち葉の清掃

2. チャリティバザー出展

小牧まつり協賛チャリティバザー(会員交流慈善活動)

* 日時 10月15日(土) 小雨時々曇り

10月16日(日) 晴れ

* 場所: 名鉄小牧線 小牧駅メロデーパーク広場

* 人員: 延23名

会員皆さんの努力で商品も予想以上にそろいました。

土曜日は小雨となりお客の入りも少なかったが、日曜日は祭り日和の好天気に恵まれ元気な会員各位の販売支援で店は大いに賑わい売り上げも好調であった。

今年も会員の皆さんのおかげで小牧祭りの広場を、踊りや歌の催しと、バザーで盛り上げることが出来満足しています。(売上金の一部は震災支援募金に協力しました)



小牧駅メロデーパーク広場

3. 小牧市環境フェア出展

協賛「みんなで楽しく分別ゲーム」開催

* 日時 11月19日(土) 天候 雨

11月20日(日) 天候 晴れ

* 場所: 小牧市公民館2Fロビー会場

* 人員: 延べ17名

* 活動目的: 資源ゴミを正確に分別する知識を学び資源の再利用を拡大して環境にやさしいまちづくりを推進する。



小牧市環境フェア

ゲーム内容: 「資源ゴミ」(カン・ビン・ペットボトル・ビニール容器包装・金属)と「その他」に正確に分別する。

昨年に続いて第5回の協賛出展であるが、今年はより分別の解りにくいゴミ(物品)を加えて参加者の分別知識の向上を図る事とした。

土曜日は雨天のため参加者も少なかったが日曜日は秋日和に恵まれ多数の参加者に分別知識を普及することが出来た。特に親子でのゲーム参加者も多かったので次世代につなぐエコ活動としても期待している。

・分別ゲーム参加者 19日30組、22日88組

グラウンドワーク小牧 青木和芳

(第5話)現代川柳(その2)

現代川柳は俳句との違いがよく分からないという意見があります。確かに現代川柳は川柳というジャンルに属しているから川柳であり、俳句というジャンルに属していれば俳句と言われるものが多くあります。俳句にも改革の流れがあり、川柳との垣根が低くなっています。私はこれで良いと思っています。それでも、長年つちかった感覚でしょうか、川柳と俳句はやはり違うと感じています。俳句では詠めない(詠みにくい)ものを川柳で詠む、という意見に一人で頷いています。



ここまで書いてもまだ現代川柳がよく分からないと思いますので、「川柳連れ連れ草100号達成記念号」に載せた私の句を記してみます。

☆期することひとつやふたつ雑煮食べ
 ☆スキの穂ゆったり揺れて平和かな
 ☆夢という文字が浮かばぬあぶりだし
 ☆耐えること慣れて夫婦という絆
 ☆秋迎え風はよし夢追うもよし
 ☆祖母に母娘があつて歴史です
 ☆炎天下生きて生かされ席譲る
 ☆大掃除ほうきの先に残る未練
 ☆枝たわわ辛い時には愚痴を言う
 ☆ありふれた花火にもある使命感



インターンシップ事業の報告

グラウンドワーク東海 インターンシップ担当 安江建生



集合研修(三島市)

2年間にわたるこの事業は、残り4か月を残すのみとなりました。研修もすべて終わり、いよいよ最終段階です。現在は、すべての研修生のレポートや、起業状況の集計、事業全体の総括に入っています。

グラウンドワーク東海は、第Ⅲ期で159人の研修生を送りました。これは、本部(グラウンドワーク三島)から割当の100人を大きく上回りました。世情を反映してか、研修生の多くは失業中で、この研修を通じて新たな活路を切り開こうとしている人たちの姿が印象的でした。研修生にはNPOで「生活が可能なだけの収入が得られる



OJT研修

か)、「社会に求められるNPOの姿とは」など多くの課題があり、理想と現実を踏まえ乗り越えなければならない大きなハードルがあることも感じさせられました。Ⅲ期OJTは、Ⅱ期と同様、グラウンドワーク東海が起点となって、名古屋テレビ映像、博石館(中津川市)、岩村地域協議会(恵那市)の協力を得て、30人ほどの実務研修をおこないました。ここでは地域活性化をテーマに「地元の産業」、「まちづくり」、「地域からの情報発信」について学びました。また、グラウンドワーク東海の研修生からインキュベーションのビジネスプランに57の提案がありました。モノづくり中部ならではの「ガラス工芸で町の活性化」、「カラクリで町の活性化」などのユニークなアイデアが選考され、一部の研修生は現在起業の準備に入っています。グラウンドワーク東海ではインターンシップ事業を通して、2年間で250人以上の新しいネットワークが構築されました。グラウンドワーク活動で研修終了後も支援しながら、インターンシップで身につけた知識が糧になり力になっていくことを期待します。

編集後記

9月の環境デーなごやに出展したバケツ稲6個の刈取り乾燥後、脱穀したら^{もみ}稲の重量は600gでした。ご飯茶碗何杯分か計算すると、5~6杯分になりそうです。

計算は、^{もみ}稲600g → 玄米438g (73%) → 白米(394g (2.6合)90%)です。炊飯すると1合でお茶碗2杯強になり、2.6合×2杯強で5~6杯分になる計算です。

11月下旬に、高山の実家へ母を見舞いに行ったら、漬物用に出荷する赤カブの収穫の最中です。一個づつ包丁で葉と根を落とす作業を子供も手伝っていました。

事務局の片付けと清掃はようやく終わり、これからフォーラムの準備と新年度の計画づくりです。 宮前記



刈取り後の稲



赤カブの収穫

赤カブ



〒461-8508 名古屋市東区東桜2-3-7-616

NPO法人 グラウンドワーク東海

TEL/FAX : 052-935-7430

E-mail : npo.gw-tokai@blue.ocn.ne.jp